

暗夜行路

志賀直哉著

暗夜行路

座右寶刊行會刊

昭和十八年十一月十五日印刷
昭和十八年十一月十九日發行

初刷 一〇〇〇部

④定價 二十圓
特別行爲稅相當額 一圓六十錢
合計 金二十一圓六十錢

著者 志賀直哉

發行者 東京都日本橋區江戸橋二ノ八 後藤眞太郎

印刷者 東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二 杉山退助

印刷所 東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二 大日本印刷株式會社 (東京)

出文協承認ア 360190 號
付奥路行夜暗 製舊許不

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

東京都日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル

發行所 座右寶刊行會

電日本橋二〇八一・二四五六番
振替口座東京七四五三三番
會員番號一一〇一五番

本會出版物にして萬一落丁・亂丁等御發
見の際には御申出次第御取換致します、

(製本 下島大元堂)

目次

序詞	九
第一	三三
第二	一五五
第三	二八九
第四	四六三
あとがき	六〇九

挿 繪

一	古赤繪皿圖	原色玻璃版	梅原龍三郎	八
二	茄子	木版	小林古徑	三
三	仔猫	玻璃版	榊原紫峰	二五
四	馬	オフセット版	坂本繁二郎	二六
五	神狗	木版	佐藤清藏	二六
六	百合根	木版	武者小路實篤	四六
七	人形を持てる少女	原色版	安井曾太郎	四三
八	さくら	原色版	安田靫彦	五八

見返 赤繪人物圖 原色玻璃版
題字

梅原龍三郎
小林古徑



古赤繪皿圖

梅原龍三郎

暗
夜
行
路

序

詞

（主人公の追憶）

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病氣で死に、その後二月程経つて、不意に祖父が私の前に現はれて來た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其處へ來て立つた。眼の落ち窪んだ猫脊の何となく見すばらしい老人だつた。私は何といふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをはぐらかして下を向いて了つた。釣上つた口元、それを圍んだ深い皺、變に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、尙意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。私は妙に居堪らない氣持になつて來た。私は不意に立上つて門内へ駆け込んだ。其時、

「オイ、お前は謙作かネ」と老人が脊後から云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止つた。振返つた私は心では用心してゐたが、首はいつか音なく點頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振った。然し此うは手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて来て、私の頭へ手をやり、

「大くなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親である事を既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると、何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其處には祖父の他にお榮といふ二十三歳の女が居た。

私の周囲の空氣は全く今までは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に残つて居るのに、自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼時から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起

るだらうと云ふ漠然とした豫感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ヶ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく當る事はなかつたが、常に／＼冷たかつた。が、この事には私は餘りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の經驗としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故、私はその事をさう悲しくは感じなかつた。

母は何方かと云へば私には邪慳だつた。私は事々に叱られた。實際私はさかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかかはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあつた梯子から誰にも氣づかれずに一人、母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の處まで行つて馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い處へ登つたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる……

間もなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでゐるのに気がついた。それは氣味の悪い程優しい調子だった。

「あのネ、其處にぢつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其處に音なしにして居るのよ」

母の眼は少し釣上つて見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乗りの儘少し後じさつた。

「ああつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしのこと。お母さんの云ふ事をよくさくのネ」

私はぢつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はさう思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。